

「ドクター平三郎の世界漫遊記」

国立がんセンター名誉院長
(財)早期胃癌検診協会理事長 市川平三郎 著

東京大学医学部教授・腫瘍外科

武 藤 徹一郎

“それでも地球は回っている”というガリレオの言葉はあまりにも有名であるが、本書を読んで筆者の頭にはこの言葉がまず浮かんできた。著者の市川博士が、X線二重造影法で描出された胃の早期癌を欧米の専門家たちに見せてもなかなか理解されない状況の中で、“それでもこれは早期癌だ”と叫びつつ奮戦される姿が本書に生き生きと描写されているからである。

今でこそ、X線二重造影法は胃でも大腸でもルーチンの検査としてわが国で定着しているが、この技術が確立され、日本での普及が始まったのは昭和30年ごろからであり、その普及は国内においてすら決して容易なことではなかった。その普及の達成には早期胃癌研究会をはじめとして、各地で熱心に継続されている胃癌を中心とする消化器疾患研究会の存在の力が大きく、その努力は現在でも綿々と続けられている。胃癌多発国であるわが国では、胃癌の早期発見には国民的な関心があるので、その普及は当然のことのように考えられるが、それでも新しい技術が確立され広く普及するには、多数の人々の絶えざる努力・情熱と時間が必要だったのである。しかし、これが胃癌が少ないために興味もあまりない欧米が相手であるうえに、言葉の問題や人種の偏見の要素も加われば、それがはるかに困難な仕事であることは想像に難くない。時代も日本が経済大国となる何年も前の昭和30年代であれば、その困難さは想像を絶するものがあったであろう。

本書の著者市川博士が故白壁博士と並んで胃のX線二重造影法を確立し、若い専門家の教育とその技術の普及に多大の貢献をされたことは消化器専門家でなくても広く知られている。本書はその市川博士が昭和34年から38年間、X線二重造影法の紹介と早期胃癌の概念の普及のために、35か国を55回にわたり駆け巡った際の見聞をドキュメント風に記したものである。昭和34年と言えば1ドル＝360円の時代、外国留学は医局にとって一大事業であった。著者はアメリカに留学するときに多数の医局員の見送りを受け、バンザイ三唱で羽田から送り出されるのだが、今では想像もできないこんな風景が当時は当たり前であった。昭和30年代とはそういう時代であったのだ。

この時代にアメリカへ渡って生活するだけでも大変なのに、胃癌に興味もなく早期胃癌など見たこともない人々に、X線二重造影法の有用性を理解させようとするのは並大抵のことではなかっただろう。その苦労の数々が本書に興味深いエピソードとともにたくさん出てくる。専門家というものは、自分の経験に強い自信を持っているために大体が頑固である。その頑固な外人に対して、新しい技術である二重造影法の有用性を事例をもって説いていく著者の情熱と闘争心が、本書からヒシヒシと伝わってくる。著者にとってはまさに切込隊の心境であったに違いない。本書はタイトルの通り、世界漫遊記として読んででも十分におもしろ

いが、幾多の困難な状況の中ではじめはほとんど孤軍奮闘で、各国にX線二重造影法を説いて廻った著者の情熱を読み取るべきであろう。現在では早期胃癌の概念は欧米でも理解され、欧米の若い医師たちが日本に勉強しに来るようになり、日本の専門家たちにとって国際的な活動は容易になったが、これも著者をはじめとするわが国のパイオニアたちの情熱と血のにじむような努力とのお蔭であることを忘れてはならない。昭和45年、筆者がイギリスで早期胃癌の病理の話をしたときに、早期胃癌を全く見たことがなかった彼らは“それは日本の病気(Japanese disease)だ”と言って全く聞く耳を持たなかった。それより10年も前にはどれほど困難な仕事だったかを思うと、本書の逸話の1つ1つにも感銘を新たにする思いである。

本書には上述の内容のほか、各国での癌学会のこと、ご自身の病気体験のこと、近藤誠氏への批判、ワンショット・エッセイなど著者の人生観がうかがい知れる小文も多数載せられていて、それぞれに興味深い内容に満ちている。

同世代あるいはその一部をとともに生きた人々は、当時の出来事を自らの体験に重ね合わせ、懐かしみつつ本書を楽しむのもよい。一方、若い世代の人々は先人の努力の上に現在があることを知るために、ぜひ一読されることをお勧めしたい。

● A6 頁322 1997 定価(本体
1,905円+税) 円310

発行 タケハヤ株式会社(☎ 03-3817-5347) 発売 星雲社(☎ 03-3947-1021)